

文末に終助詞を伴う係結をめぐって

源氏物語を資料として

小田 勝

On the co-occurrence between Auxiliary Particles and Sentence-final Particles in the classical *kakari-musubi* Construction

Masaru Oda

Key words

終助詞 係り結び

要 旨

中古和文において、「文末に終助詞を伴う係結」は「ぞ や」「ぞ か し」「こそ や」の三型しかみられない。ほかの組み合わせ、たとえば「ぞ な」が存在しないのは、「ぞ」の「自領域知識の述べ立て」という機能と「な」の「聞き手領域知識の確認」という機能が矛盾するためである。のように説明される。また「ぞ や」は出現傾向からみて係助詞「なむ」に類似しており、「ぞ か し」は係助詞「こそ」に類似していることが指摘される。

○ 本稿の目的

係助詞が文中にあって文末の活用語がこれを受けるとき、その活用語が活用形を変える現象を「係結」(係り結び)という。

- 1 月影ばかりぞ八重律にもさはらずさし入りたる。(源氏物語・桐壺・第 冊一〇頁)

と「るで」右のような係結の文には、次例 2・3 のように、結びの末尾に終助詞²⁾を伴う例もみられる。

- 2 「……」など「女房ガ紫上ニ」言ふも「紫上八」それ(「女房ノ詞)をば何とも思したらぬぞあさましきや。(若紫・二二八)

- 3 「弁八」若き人にて、気色もえ深く思ひよらねば、「三夜餅ヲ」持て参りて、「紫上ノ」御枕上の御几帳よりさし入れたるを、君(「源氏)ぞ例の「紫上二三夜餅ノ意味ヲ」聞こえ知らせ給ふらむかし。

(葵・三七六)

本稿は、源氏物語を資料として、「文末に終助詞を伴う係結の文」の実態を調査し、どのような句型が存在するか、右の 2 と 3 とではどのような相違があるのか、などについて考察するものである。対象とする係助詞は「ぞ」「なむ」「こそ」の三語とし、「や」「か」は考察の対象外とする。また、和歌中(引き歌部分を含む)の例も対象外とする。

一 「文末に終助詞を伴う係結の文」の実態

源氏物語において、「文末に終助詞を伴う係結の文」は全一二〇例存する。源氏物語において、結びの流れや結びの省略、係助詞の文末用法などを除いた「係結として成立した文」は、全三三六七例存するから、成

立した係結の文の四%弱が結びに終助詞を伴っていることになる。その内訳は、次のようである。

ぞ	や	かし	よ	な
七三	三七	一		
なむ				
一				
こそ	一			六

右から、終助詞を伴う係結は、「ほとんど」「ぞ」だけであること、係結の結びに伴う終助詞は、「ほとんど」「や」と「かし」だけであることがわかる。⁴なぜ、「文末に終助詞を伴う係結の文」が「ぞ」「や」「かし」の句型に集中するのか考えたいが、その考察に先立って、用例のわずかな句型についてみておこう。

まず、「ぞ」「よ」の句型は、次の一例である。

- 4 後夜の御加持に、御物怪出で来て、「かうぞあるよ。いとかしこう
「御身（源氏）ガ私カラ紫上ヲ」取り返しつと「紫上」一人をば思
したりしが、いとねたかりしかば、このわたり（＝女三宮）に、さ
りげなくてはなむ日頃さぶらひつる。今は帰りなむ」とてうち笑ふ。
（柏木・一四一）物怪詞⁵

右例は、青表紙本、河内本に異文はないが、物怪の詞であり、かなり特殊な例と考えられる。右の「かうぞあるよ」は平安時代の人にとつて、かなり奇異に響く表現だったのでないだろうか。

「なむ かし」の句型は次例5「こそ や」の句型は次例6の一例である。どちらも用例末尾に表示したように、河内本および青表紙本の数本に異文がある。

- 5 たしかなむ承らまほしき。「末摘花ガ」変らぬ御有様ならば「源氏ガ末摘花ヲ」尋ね聞こえさせ給ふべき御志も絶えずなむおはしま

すめるかし（蓬生・一六七）惟光詞 おはしますめるかし 河内本「おはしますを」⁶

- 6 かの（＝宇治ノ姫君達ノ）心どもには、さもや（＝勾宮ノ求愛ハ本心力）とうちなびきぬべき気色は見えずなむ侍る。仕つまつりにくき宮仕（＝骨ノ折レル奉仕）にこそ侍れや。（総角・一二四）薫詞 宮仕にこそ侍れや 御池肖三、河内本「宮つかへにそ侍や」
「こそ かし」の句型は、次例7の一例だけである。

- 7 女御（＝明石女御）の、あまりやはらかにおびれ給へるこそ、かやうに（＝柏木ノヨウニ）「明石女御ニ」心かけ聞こえむ人（＝男）は、「柏木ニ」まして心乱れなむかし。（若菜下・九八）源氏心
右例7は、「こそ かし」の句型に関して（青表紙本、河内本に異文がない。⁷

「こそ な」の句型は六例みられる（用例8～13）。13を除き、（青表紙本、河内本中に）異文がみられないので、用例数は少ないながら、この句型は認められるものと思われる。

- 8 「源氏ハ」惟光に、「この西なる家は何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」とのたまへば、「惟光ハ」例のうるさき御心とは思へど、さは申さで、「……」など、はしたなげに（＝無愛想ニ）聞こゆれば、「源氏ハ」「御身ハ私ヲ」憎しとこそ思ひたれな。されど、この扇の尋ぬべき故ありて見ゆるを、なほこのわたりの心知れらむ者を召して問へ」とのたまへば、…（夕顔・一一一）源氏詞

- 9 右近「玉鬘ヲ受領ノ妻ニナドト三條ハ」とゆゆしくも言ふかな、と聞きて、「御身ハ」と、いたくこそ田舎びにけれな。……」と

- 10 「三條ニ」言へば、…（玉鬘・三七九）右近詞
「古代の歌詠みは、唐衣、袂濡る」「ナドノ」かごと（＝恨三言（

こそ離れねな。……」など「源氏八」笑ひ給ふ。(玉鬘・四〇四) 源氏詞

11 「女三宮カラノ」御返り、すこしほど経る心地すれば、「源氏八部屋」入り給ひて、女君(紫上)に花を見せ奉り給ふ。「花といはば、かくこそ匂はまじけれな。……」など「源氏八紫上二」のたまふ。(若菜上・三三二) 源氏詞

12 「私(匂宮)ノ」聞こゆるままに「信ジテクレテ」あはれなる御ありさまと見つるを「御身(中君)八私二」なほ隔てたる御心こそものし給ひけれな。さらずは、夜のほどに、思し変りにたるか」とて「匂宮八」わが御袖して涙を拭ひ給へば、(宿木・二四九) 匂宮詞

13 人々「紫上カラ」退きつつさぶらへば「源氏八紫上二」寄り給ひて、「なごかくいぶせき御もてなしぞ。「御身八」思ひのほかに心憂くこそおはしけれな。人もいかに怪しと思ふらむ」とて、「紫上ノ」御衾をひきやり給へば、…(葵・三七三) 源氏詞 おはしけれな 河内本「おはしけれ」

以上から、「文末に終助詞を伴う係結の文」は、そのほとんどが、

- ぞ 連体形 + や
- ぞ 連体形 + かし

の句型であり、ほかに、

- こそ 已然形 + や

の句型も若干みられる、ということが出来る。「文末に終助詞を伴う係結の文」は、なぜこの三型しか存しないのだろうか。節を改めて考えてみよう。

二 なぜ三型しかみられないか

「文末に終助詞を伴う係結の文」が前節末にあげた、の三型しか存しないのはなぜだろうか。このことに答えるためには、係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」および終助詞「や」「かし」「な」がどのような機能をもつのかを知らなければならぬ。

係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の表現性に関する代表的な論として、森野宗(一九八七)および伊牟田経久(一九七六)の所論をみてみよう。

「ぞ」の場合、終助詞との共起等他の要因がない限り、述定の文の構成に關与するに留まるのに対し、「なむ」の用いられた文は、常に「述定 + 伝達」の文となるのである。「こそ」も、単独で「述定 + 伝達」の文を構成することはないと思われる。(森野宗 一九八七) さきに、ナムは情をこめて聞き手にもちかけようとする態度を表す語と考えたが、それに対して、ゾはことさらに客観的に説明する場合に用いる指示強調語であり、「コソは言語主体の主観的判断を表す語である、と考えられる。(伊牟田経久 一九七六)

右にみるように、両氏とも、「ぞ」「なむ」「こそ」の中で、「なむ」だけがその表現価値を大きく異にする、という認識で共通しており、森野宗(一九八七)は、

- なむ……………「述定 + 伝達」の文を構成する
- ぞ・こそ……………「述定」の文の構成に關与するに留まる

とその差を捉えているし、伊牟田経久(一九七六)は

- なむ……………聞き手にもちかける
- ぞ・こそ……………説明する

のようにその差を捉えている。伊牟田経久(一九七六)はさらに、「ぞ」

と「こそ」の差について、

ぞ……………事柄を客観的に説明する

こそ……………言語主体の主観的判断を表す

としている。長尾高明（一九八七）は、現在のところ、右のような理解が研究者の一致をみる共通項といえるとして、次のように述べている。

現在のところ、およそ次のような点が、共通した理解としてまとめられるであろう。

なむ 事柄を自身が納得し確かめたという意識から、聞き手にも

確認させるように語る強調表現。会話語には多用されるが、和歌や心中忠惟の表現にはほとんど用いられない。

ぞ 具体的な事実に関して、客観的に叙述する態度で強調する

表現。強調の度合いは、概して、「なむ」よりは強い。

こそ 主観性が強く、強調の度合いも他の二つに比べて最も強い表現。

そこで、「な」を、

述者の知る客観的事柄（述者の「なわ張り」¹⁰内の事柄）を聞き手に説明するもの

として、「自領域知識の述べ立て」、「なむ」を、

事柄を確定的に聞き手に強くもちかけるもの

として、「確定的内容のもちかけ」、「こそ」を、

述者自身の主観的判断を示すもの

として、「主観判断・非もちかけ」と捉えてみよう。

終助詞「かし」「および」「な」の表現性については、森野崇（一九九二）に論があり、「な」は

14 あこは知らしな（帚木・八六）

のように、聞き手の方がより正確に把握していると想定される事柄に関して確認する際に「用いられることが知られている。一方「かし」は、「自分自身に向けての再確認のはたらき」をもち、聞き手の知らない事柄に関する発話」にも用いられることがあるという。「や」については、近藤泰弘（一九七九）が、

「や」の持つ「聞き手への呼びかけ」的性格に注目せざるを得ないだろう。そのような、聞き手を意識した会話語的性格が「や」には含まれていたと考えられる。

としている。そこで、「な」を、

聞き手の方がより正確に把握していると想定される事柄に関する確認を表すもの

として、「聞き手領域知識の確認」、「かし」を、

述者の知る事柄（述者のなわ張り内の事柄）についての確認を表すもの

として、「自領域知識の確認」、「や」を、

聞き手への呼びかけ的性格があるものとして、「もちかけ」と捉えてみよう。

以上の係助詞および終助詞の表現性を考慮して、その組み合わせを考えてみると、次のようになるだろう。

- | | | |
|---|------------------|---------------|
| A | ぞ（自領域知識の述べ立て） | や（もちかけ） |
| B | ぞ（自領域知識の述べ立て） | かし（自領域知識の再確認） |
| C | ぞ（自領域知識の述べ立て） | な（聞き手領域知識の確認） |
| D | × こそ（主観判断・非もちかけ） | や（もちかけ） |
| E | × こそ（主観判断・非もちかけ） | かし（自領域知識の再確認） |
| F | こそ（主観判断・非もちかけ） | な（聞き手領域知識の確認） |

G × なむ(確定的内容のもちかけ) や(もちかけ)
 H × なむ(確定的内容のもちかけ) かし(自領域知識の再確認)
 I × なむ(確定的内容のもちかけ) な(聞き手領域知識の確認)
 このようにしてみると、それぞれの組み合わせの中で、A B Fのみが自然な組み合わせであることが容易に理解されよう。

Aは「ぞ」が述者の領域にある事柄を述べ立て(自領域知識の述べ立て)、「や」がそれを聞き手にもちかける(もちかけ)もので、その表現性は自然であるといえる。Bも、「ぞ」が述者の領域にある事柄を述べ立て(自領域知識の述べ立て)、「かし」が述者自身に向けてそれを再確認する(自領域知識の再確認)もので、これもまた自然な組み合わせといふことができよう。

ところが、Cは、述者の領域にある事柄の述べ立て(自領域知識の述べ立て)を表す「ぞ」と、聞き手の領域にある事柄の確認(聞き手領域知識の確認)を表す「な」とで、その表現性は矛盾する。Dは、述者自身の主観的判断(主観判断・非もちかけ)を表す「こそ」と、聞き手への呼びかけの性格(もちかけ)をもつ「や」がかみ合わない。Eは、述者自身の主観判断(主観判断・非もちかけ)を表す「こそ」と、述者の領域にある事柄についての再確認(自領域知識の再確認)を表す「かし」がかみ合わない。Fは「こそ かし」の句型は源氏物語に一例だけみられる。Fは述者の主観判断(主観判断・非もちかけ)を表す「こそ」と、聞き手の領域内にある事柄についての確認(聞き手領域知識の確認)を表す「な」の組み合わせであり、極めて自然な組み合わせといつわけでもないが、特に矛盾もない。

Gは「なむ(確定的内容のもちかけ)と「や(もちかけ)とでその表現性は矛盾しないが、機能が重複するため存在しないものと考えられ

る。これについては近藤泰弘(一九七九)に論があり、氏は、

「なむ や」の構文は、「なむ 自体に「や」の機能を含むために存在しない。

と述べておられる。Hは聞き手にもちかける(確定的内容のもちかけ)機能を持つ「なむ」と、述者自身にむけての再確認を表す「かし」(自領域知識の再確認)が矛盾する。これについては森野崇(一九九二)に論があり、氏は、

「かし」が「なむ」と共起しないのは、双方に強く聞き手を指向する性質があるからではなく、「かし」の、いわば自分自身へ向けての再確認のはたらきと、「なむ」の、確定的なモノ・コトをとりたてて聞き手へ向けてもちかけていくはたらきとが、かみあわないからではなからうか。

と述べておられる。Iは事柄を確定的に聞き手に持ちかける(確定的内容のもちかけ)「なむ」の機能と、聞き手の領域にある事柄を確認する機能をもつ「な」(聞き手領域知識の確認)がかみ合わない。

右のような次第で、文末に終助詞を伴う係結の文は、右のA B Fしか存しないと考えられるのである。

また、右のような係助詞と終助詞との組み合わせの可否からも、さきの考察で仮に依拠した、係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の表現性、および終助詞「や」「かし」「な」の表現性に関する所論が、支持されるのである。

三 「ぞ や」と「ぞ かし」

さて、文末に終助詞を伴う係結「の句型である」ぞ や「および」ぞ

かし」はどのような表現性をもつのだろうか。まず、両者が、地の文、会話文、心中文にどのくらい現れるか、みておこう。その実態は、次の通りである。

表1 地の文 会話文 心中文

ぞ	四八(66%)	二二(29%)	四(5%)
ぞかし	一四(38%)	一〇(27%)	一三(35%)

ところで、地の文、会話文、心中文に現れる係助詞は、「ぞ」「なむ」「こそ」によってかなり差があることが知られている。これについては、永井泷(一九三八)、宮坂和江(一九五二)ほか諸氏の統計があるが、ここでは森野崇(一九八七)の計数による源氏物語の状況を示そう(表は縦に、「ぞ」の係結の七二%が地の文に、一二%が会話文に現れる、のようにみる。消息文中の例は会話文に含めた)。

表2 地の文 会話文 心中文 和歌

ぞ	七二%	一一%	六%	一〇%
なむ	一六%	八三%	〇・六%	〇%
こそ	九%	六五%	一三%	三%

「ぞ」は圧倒的に地の文に、「なむ」は圧倒的に会話文に多く用いられる。「こそ」も会話文に多く用いられるが、心中文中の係結はほとんど「こそ」に偏っている、ということがみてとれるだろう。表1の「ぞかし」の状況は、表2の「ぞ」の状況とは異質であることが注意される。「ぞ や」「ぞかし」は、地の文にそれぞれ四八例、一四例現れるが、それらの多くは、いわゆる「草子地」中のものである。地の文が「語り手が物語の世界に属する事象(作中人物の心情も含めて)」を第三者的に捉えた表現¹²⁾であるのに対し、「物語の世界とは隔絶した語りの場において、語り手が聞き手に語りかける表現」を草子地¹³⁾といふ¹⁴⁾。15・

16のような文を草子地と捉える。

15 「雲居雁八自分ノ」独り言を「夕霧ガ」聞き給ひけるも恥づかしうて、あいなく御顔「夜具ニ」引き入れ給へど、あはれは知らぬにしもあらぬぞ憎きや。(少女・三三四)

16 「さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかげを見ぬぞ悲しき」と「源氏八」思すままに、あまり若々しうぞあるや。(賢木・三九八)

15は諸注に、

「双子の詞也」(一葉抄)、「草子地也」(細流抄)、「草子地也」(明星抄)、「草子地也」(岷江入楚)、「双」(休聞抄)、「双」(林逸抄)、「双」(紹巴抄)、「姫君の心になりて紫式部かいた年もいかぬにと批判する詞也」(孟津抄)、「草子地で、語り手の雲居雁への評語」(日本古典文学全集)、「草子地」(新潮日本古典集成)

16は諸注に、

「草子地也」(細流抄)、「草子地也」(明星抄)、「式部かあまりにさそうに書たる哥のさま卑下してわかわかしきとは餘の事にいへり」(万水一路)、「草子地也作者卑下也」(首書源氏物語)、「哥を批判して云へり」(湖月抄)、「歌に対する語り手の評言」(日本古典文学全集)、「草子地。作者の弁解」(新潮日本古典集成)

のように指摘されている。草子地の概念は諸氏によって様々であり、草子地の認定も諸注、研究者によって一様ではない。

草子地には濃淡があるのだ。だれもが典型的な草子地だと認めてかまわないものから、これが草子地といえるのかと反論を呼びそなうものまで、ずらりと並ぶ。(藤井貞和 一九八〇 一三三ページ)

ということもまた事実であるが、いま仮に、地の文の「ぞ や」「四八

例「ぞ かし」一四例について、檀本正純(一九八二)の草子地の挙例(全一〇六二例)で検すると、「ぞ や」の三六例、「ぞ かし」の一〇例が諸注に草子地として指摘されている。そこで、表1は、表3のように改められることになる。

表3 地の文 草子地 会話文 心中文

ぞ や	一四	三六	一九	四
ぞ かし	七	一〇	九	一一

草子地とは「語り手が聞き手に語りかける表現」であり、

17 昔物語にも、物得させたるをかしこき事には数へ続けためれど、いとつるさくて、こちたき御中らひの事ども(=物語上ニ登場シナイ多クノ人々ノ、源氏ノ四十賀ヘノ贈物)は、えぞ数へあへ侍らぬや。(若菜上・三四六)「草子地也」(細流抄)、「草子地也」(明星抄)、「紫式部か詞也」(孟津抄)。

のように、通常会話文や消息文にしか現れない「侍り」もみられることから、草子地を会話文に含め、その百分率で示すと、表3は表4のように改められることになる。

表4 地の文 会話文 心中文

ぞ や	一九%	七五%	五%
ぞ かし	一九%	五一%	三〇%

ここで、表4と表2を比べると(左参照)。

表2 地の文 会話文 心中文

なむ	一六%	八三%	〇・六%
こそ	九%	六五%	二二%

「ぞ や」の出現状況は係助詞「なむ」のそれに「ぞ かし」の出現状況は係助詞「こそ」のそれに類似する、ということがみてとれる。「ぞ

は終助詞「や」の助けを借りて係助詞「なむ」に、終助詞「かし」の助けを借りて係助詞「こそ」に近い表現性を獲得していると考えられるのである。

「ぞ かし」の句型には

18 「夕霧八」まして行く先は並ぶ人なき御おほえにぞあらむかし。

(少女・三〇六)「草子の地なり」(岷江入楚)、「草子地に云也」(湖月抄)

19 げにさぞ思すらむかし。(横笛・一七三)源氏心

20 内裏には御物の怪のまぎれにて、とみに「妊娠ノ」気色なうおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。(若紫・二〇二)「双也」(休聞抄)、「双幣」(林逸抄)、「双なり」(紹巴抄)、「草子の地也」(岷江入楚)

21 「大君ガ」おはしまさましかば、宮の上(=中君)などのやうに「薰ノ妻トナリ」「才互イ」聞こえ通ひ給ひて、心細かりし御有様どもの、いとこよなき御幸ひにぞ侍らましかし。(浮舟・一三三)

弁尼詞

のように、多く推量の助動詞が現れ、「ぞ 推量の助動詞+かし」の句型で「ぞ かし」の七八%を占める。一方、「ぞ や」の方は、「ぞ 推量の助動詞+や」の句型は一例もない。このことも、係助詞「なむ」の結びには不確実を表す助動詞「む・らむ・けむ・まし・じ」がこないこと、係助詞「こそ」が述者の主観的判断を表す文に用いられることと、並行的な現象といえるのではないだろうか。

注

- (1) 調査に用いたテキストは、『対校源氏物語新釈』（平凡社刊）である。引用にあまり、表記は私意によって改めた。以下、用例の所在は、「桐壺・一〇」のように略記する。
- (2) 終助詞のほかに間投助詞をたてる考えかたもあり、例えば山田孝雄（一九五二）は、中古語において、「か」「が」「な」「かし」「を終助詞」「や」「し」「よ」「を」を間投助詞とする。本稿では、湯沢幸吉郎（一九五九）などの扱いに倣い、両者を一括して終助詞とした。特に、本稿で問題となる「ぞ や」「ぞ かし」の「や」「かし」は、それ自体で二つの表現性をもつもので、「取り去っても文の成立そのものには影響がなく、文字どおりの添えもの、という印象を与える」（渡辺実 一九八〇）といわれる間投助詞とは性格が異なるように思われる。なお、私見によれば、古典語の終助詞は、体言または活用語の連体形について文を成立させる働きをもつもの（A）と、成立した文に付加されるもの（B）とがある（小田勝 二〇〇四 一一八頁）。
- A か・かな・かも・は
B かし・も・な・や・よ・を
- したがって、係結の文末に現れる終助詞はBの語しかあり得ない。
- (3) 正確には、係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の全用例数から、次のものを除外した数値である。
- 和歌中（引き歌部分を含む）、係結の不整合、係結の不成立、文末（結びの省略を含む）、「なぞ」「ぞは」「ぞや」「こそは」「結びの流れ」。
- (4) 係助詞「ぞ」「は」「なむ」「や」「こそ」に「くらべて終助詞」「や」「かし」と調和しやすく、「ぞ」による成立した係結（全一〇三四例）のうち約一割（一一一例）が結びに終助詞を伴っている。
- (5) 以下、用例が地の文の場合は「地」、会話文の場合は「物怪詞」（＝物怪の会話中の文の意）のように示す。
- (6) 以下、青表紙本・河内本系統の諸本中に、論点部分に異文がある場合は、『源氏物語 校異篇』にしたがって、注記する。諸本名も同書略号を用い、青表紙本系統はそのまま、河内本系統はその略号に傍点を付して示した。河内本（全部）対青表紙本の対立のときは、単に「河内本……」と示した。

- (7) ただし用例7は文の係り受けがやや整っていない印象を受ける。日本古典文学大系は「女御のあまりやはらかにおびれ給へるこそ」後めたけれ「かやつに、心かけ聞えむ人は、まして、心乱れなんかし」のように句読する。
- (8) 用例12の「御心こそものし給ひけれな」はテキスト（湖月抄）の独自本文といふべきで、『源氏物語大成 校異篇』所載の青表紙本、河内本のすべてが「御心こそありけれな」である。ただしどちらでも「こそ な」の句型の例であることに変わりはない。
- (9) 源氏物語以外の中古和文九作品、
竹取物語・土佐日記・伊勢物語・大和物語・蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・紫式部日記・和泉式部日記
- においても、文末に終助詞を伴う係結の文は、「ぞ や」「ぞ かし」の句型しかみられず、それ以外の句型は、わずかに次の二例のみである（伊勢物語・大和物語・落窪物語・枕草子は日本古典文学大系本、紫式部日記は新日本古典文学大系本、竹取物語は、竹取物語総索引、土佐日記は、土佐日記本文及び索引、蜻蛉日記は講談社学術文庫、和泉式部日記は『和泉式部日記総索引』による）。
- 「なむ や」心憂げなる御端書をなむ、げにと思ひ聞こえさせしや。（蜻蛉日記・下二六三）詞
- 「なむ かし」二条におはして、「うえはかくなんのためふかし」と聞こえ給へば……（落窪物語・一五八）詞
- なお第一例は、上村悦子『蜻蛉日記 校本・書入・諸本の研究』（古典文庫刊）によれば、全本「御はしかきをなんげにと思きこえさせしや」で異文がない。「させしや」の部分、本文不書。右例の「させしや」は校注者の意改と思われる。
- (10) 神尾昭雄（一九九〇）参照。
- (11) 「なむ」は不確実を表す助動詞「む・らむ・けむ・まし・じ」を結びにしない（伊牟田経久 一九七六・高山善行 二〇〇二）ことから、「なむ」は事柄を「確定的」に示すと考えるられる。
- (12) 甲斐睦朗（一九八〇）二二頁。
- (13) 甲斐睦朗（一九八〇）三七頁。
- (14) 榎本正純（一九八二）による。
- (15) 注13。

- (16) 諸注は榎本正純(一九八二)による。以下同じ。
- (17) 「ぞ や」の表現性が「なむ」に相当するということは、近藤泰弘(一九七九)にすでに指摘があり、氏は「ぞ や」と「なむ」が等しく和歌に現れないこと、「なむ や」の句型が存在しないこと、などをその論拠とされておられる。地の文、会話文、心内文中の出現率からも両者の類似性が示されるのである。
- (18) 「ぞ む+かし」一〇例、「ぞ らむ+かし」七例、「ぞ けむ+かし」五例、「ぞ めり+かし」四例、「ぞ まし+かし」二例、「ぞ なり+かし」一例。終助詞「かし」自体がその傾向にある。森野崇(一九八七)によれば、源氏物語で、終助詞「かし」の上接語に客体的表現にあずかる助動詞がくるのは九五例(「かし」全用例の一六%)、主体的表現にあずかる助動詞がくるのは二五〇例(「かし」全用例の四二%)であるという。
- (20) 伊牟田経久(一九七六)、高山善行(二〇〇二)。

引用文献

- 伊牟田経久(一九七六) 「ナムの係り結び」、『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』
- 榎本 正純(一九八二) 『源氏物語の草子地 諸注と研究』笠間書院
- 小田 勝(二〇〇四) 『古典文法読本』開成出版
- 甲斐 睦朗(一九八〇) 『源氏物語の文章と表現』桜楓社
- 神尾 昭雄(一九九〇) 『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 近藤 泰弘(一九七九) 『構文上より見た係助詞「なむ」「なむ」と「ぞや」との比較』、『国語と国文学』五六 一一一
- 高山 善行(二〇〇二) 『「係り結び」と「推量」の助動詞』中古語における、文表現と助動詞層の交渉、『語文』七八
- 永井 洸(一九三八) 『係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の本質意義について』、『国文学』四一
- 長尾 高明(一九八七) 『古典解釈と助詞 強調表現について』、『国文法講座 古典解釈と文法 助詞の機能』
- 藤井 貞和(一九八〇) 『源氏物語の始原と現在』冬樹社
- 宮坂 和江(一九五二) 『係結の表現価値』、『国語と国文学』一九 一一

森野 崇(一九八七) 『係助詞「なむ」の伝達性』、『源氏物語』の用例から

(一九九二) 『国文学研究』九二 「終助詞「かし」の機能」、『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』

山田 孝雄(一九五二) 『平安朝文法史』宝文館出版

湯沢幸吉郎(一九五九) 『文語文法詳説』右文書院

渡辺 実(一九八〇) 『間投助詞』、『国語学大事典』東京堂出版

「付記」 本稿は平成17年度岐阜聖徳学園大学研究助成金による研究の一部である。